

第2章 松戸市の農業の現状と取り組むべきこと

1. 松戸市の概要と農業情勢

(1) 松戸市の立地環境

松戸市は、千葉県の北西部である東葛飾地域に位置し、市域は61.38 km²で、ひし形状の広がりとなっています。西側は、江戸川を挟んで東京都葛飾区と埼玉県三郷市に隣接しており、都心から約20km、電車で約30分の距離に位置し、首都圏の住宅都市として発展しています。市内には6本の鉄道が走り、市内中心部を国道6号が縦断するなど、都心や東北からもアクセスしやすい立地となっています。

また、2018年6月に松戸市初の高速道路である東京外かく環状道路（外環道）の、松戸インターチェンジが開通しました。この開通により湾岸エリア、関東各地へのアクセス性が向上しました。

【松戸市の地図】



(2) 松戸市の人口

都心に近い立地環境に所在する松戸市の人口は、2005年において46.7万人でしたが、2018年には、約49.5万人となっており、これまで増加傾向にあります。2030年には約47万人になると推計（国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」2018年推計）されていますが、今後も多くの市民で賑わうこととなります。

松戸市の昼間人口^(注)と夜間人口^(注)については、2015年において、昼間人口39.6万人、夜間人口48.3万人となっています。昼夜間人口比率^(注)は、82.0%となっており、都心へ通勤する人のベッドタウンとなっています。

※下記人口データは、各年3月31日現在



※松戸市の人口統計データより



※総務省統計局 国勢調査報告データより

(注) 参考資料 1. 用語の説明

(3) 松戸市の産業

松戸市では、大消費地に近い立地条件を背景に、都市型の近郊農業が行われています。梨、ブドウ、えだまめ、いも堀りなどの観光農業も盛んになっています。市内には3つの内陸工業団地（北松戸、稔台、松飛台）が存在します。「煙を出さない公害のない工業」を条件に企業を誘致し、工業の集積も図ってきました。また、近年では、コンテンツ産業^(注)振興事業が、内閣府の地域再生計画に認定されるなど、コンテンツ産業の誘致にも積極的に取り組んでいます。

(4) 松戸市の観光

松戸市には、2016年に121万人の観光入込客数がありました。春には、市内5か所で開催される「さくらまつり」や、花火大会、松戸まつりなど、各地域で様々なイベントが開催されています。松戸地区には、国の重要文化財に指定された「戸定邸」があります。矢切地区には、江戸時代から続く渡し舟「矢切の渡し」が、今でも残っています。小金地区には、「本土寺」「東漸寺」など、歴史・文化資源が多く存在しています。

(5) 現状の国の政策と国民の意識

国は、農業を成長産業とし農業の競争力強化を図る取組みを進めています。しかし、農業の担い手不足や、都市化による農地の減少、環太平洋パートナーシップ協定（TPP）^(注)等による農産物の自由貿易の推進によって、農業経営基盤の脆弱化が進んでいます。農業を次世代に引継いでいくための取組みや、農業経営力の強化が必要になっています。

国は、人口減少社会と地域の活性化のため、「食料・農業・農村基本計画」を策定し、農業や食品産業の成長産業化と多面的機能の維持・発揮の促進に取り組んでいます。農業の持続的な発展に関する施策として、農業経営の法人化等を通じた経営発展、農地中間管理機構^(注)のフル稼働による担い手への農地の集積・集約化、農業関係団体（農業協同組合・農業委員会）の再編整備等に取り組んでいます。また、食料の安定供給の確保に関する施策として、食品の安全確保、食育の推進と国産農産物の消費拡大、6次産業化^(注)、農林水産物・食品の輸出、食品産業の海外展開等を推進するなど、農産物の生産・加工流通過程におけるバリューチェーン^(注)の構築等に取り組んでいます。

国民の意識としては、食の安全・安心志向が高まっており、安全性・品質・新鮮さ等を評価して国産品を選ぶ消費者が多くいます。また、生活の力点に対する意識として、食生活を重視する人も増加しており、農業に対して期待することとして、より多くの安全な食料の供給や、品質や鮮度がよく、おいしい食料の供給に期待する人が多く存在します。

(注) 参考資料 1. 用語の説明

（6）千葉県の農業振興

千葉県は、温暖な気候と首都圏に位置する恵まれた立地条件から、多種多様な農林水産物を生産し農業産出額全国4位（2016年）と、全国屈指の農林水産県です。県は、「地域を支える力強い農林水産業」の実現に向けて様々な取り組みを行っています。都市農業の振興においては、収益性の高い農業を推進するため、多様な担い手への支援、限られた農地の有効活用、高度利用を図るための施設化等に取り組んでいます。また、都市農業の振興においては、農業者と地域住民の相互理解が必要であることから、農業者と近隣住民の交流も促進しています。

（7）東葛飾地域の農業振興

東葛飾地域は、千葉県の北西部に位置し、松戸市、市川市、船橋市、野田市、柏市、流山市、我孫子市、鎌ヶ谷市、浦安市の9つの市（東葛飾農業事務所の管轄市）があります。9市の面積の合計は、539.7 km²と千葉県の10.5%の面積があります。また、人口は、約273万人と千葉県人口の約44%を占め、千葉県でも都市化が進展している地域です。東葛飾地域の農業の特徴は、大都市近郊農業地帯であり、「優良農地の保全と多様な担い手の確保」を振興方針の基本とし、農業者と市民が調和した都市農業の振興を図る施策を展開しています。千葉県の農業振興地域整備基本方針では東葛飾農業事務所管内は、都市農業地域と規定されています。

【松戸市の田園風景】



(8) 松戸市の農業行政の主な取組み

松戸市では、2014年に「農業経営基盤の強化の促進に関する基本的な構想」を策定しました。そこでは自然環境と景観の保全機能、防災機能等の公益的・多面的機能を併せ持つ農地を維持し、生産性の高い農業経営を目指し、次世代に引き継げる魅力ある都市農業の推進を図ることを目的として、4つの基本的な推進方向を定めています。

【4つの基本的な推進方向】

効率的で安定的な農業経営の推進	環境にやさしい農業の推進
高所得農業を目指し、都市近郊の立地を生かした生産技術・販売・経営管理の指導体制を強化する。	安全で良質な食料を供給する農業の確立を図り、都市農業への理解を深めるため松戸市都市農業振興協議会 ^(注) を中心とした体制を整備する。
地域の秩序ある土地利用の確保	農地の多面的機能を活用した営農環境の整備
農用地の保全と有効利用により、効率的な経営を可能にする生産基盤の整備に努める。	安らぎと潤いを与える自然空間の維持・向上に努め、「都市・農地・自然」を一つの単位とした地域の自然再生を目指し、農地の公益的、多面的機能を活用しつつ地域住民との相互理解を図る。

※2014年 農業経営基盤の強化の促進に関する基本的な構想より抜粋

【主な取組みの詳細】

① 環境にやさしい農業

安全・安心な農産物の生産供給と、近隣住民の居住環境に配慮した環境保全型農業を推進しています。農産物は、生育の途中で昆虫（害虫）に食べられてしまうことがあり、収穫量が減ったり、品質が落ちたりすることがあります。害虫被害を防ぐために、農薬を使い害虫を駆除する方法もありますが、より安全・安心な農産物の生産や、環境にやさしい農業^(注)を目指すために、農薬の代わりに、防虫ネットや粘着シート、フェロモン剤^(注)を使用し、農薬をできるだけ使わない農業の支援に取り組んでいます。

(注)参考資料 1. 用語の説明

② 農業後継者等の育成

農業者の自主的な経営改善を促進し、認定を受けた農業者が誇りと意欲を持って経営の改善や発展に取り組むことが期待できる認定農業者^(注)の育成を行っています。認定農業者の育成は、松戸市の農業の安定的発展を図る上で、重要な取り組みとなっています。認定農業者数は、2018年5月時点で165経営体です。

また、「畑で愛と野菜を育む」をテーマとして畑婚事業を推進しています。農作業を通じて、お互いの人柄を知りながら、農業従事者が配偶者を見つける手伝いのほか、参加者の農業への理解の醸成、新規就農者の発掘などを目指しています。毎年、多くの方が参加し、これまで5組（2018年10月時点）が結婚しています。

【「畑婚」事業の参加人数（延べ）】

2014年	2015年	2016年	2017年
193人	141人	145人	144人

※松戸市農政課調べ

【畑婚 ブルーベリー収穫体験の様子】



【畑婚 えだまめ収穫体験の様子】



(注)参考資料 1. 用語の説明

③ 農産物のブランド化の推進

市内で生産された農産物の販路拡大および、農業経営基盤の強化に役立てるため、松戸産農産物のブランド化に取り組んでいます。環境に配慮した農業に取り組み、確かな生産技術と生産履歴を管理することで安全・安心が確認できる市内農業者に対して、「みのりちゃん」マークの使用を認定しています。

【松戸産農産物ブランド化認定団体・農家数（2018年4月時点）】

認定団体	6団体 (出荷組合や直売組合等)
加盟農家数	579人 (延べ)

松戸産農産物ブランドシンボルマーク 「みのりちゃん」

キャッチフレーズ 「松戸いきいき地場野菜・果実」

「みのりちゃん」マークやキャッチフレーズを表示できる農家とは・・・

- 松戸産農産物のブランド化に意欲的な農家であること。
- 環境にやさしい、農薬をできるだけ使わない農業を実施していること。
- 生産技術の確かな農家であること。
- 松戸産農産物の生産履歴を管理していること。

以上すべてを満たすことが基準です。

【みのりちゃん】



2. 松戸市の農業

(1) 松戸市の農業の概要

千葉県では、松戸市、流山市、鎌ヶ谷市、浦安市を除く市街化調整区域内農地^(注)がある全ての市で、農業振興地域^(注)の指定があります。

松戸市は、全域が都市計画区域^(注)で、市街化調整区域内農地と市街化区域内農地^(注)の両方の農地で農業を営んでいることも特徴的な都市農業を展開しています。また、東葛飾地域の中で、5番目の耕地面積となっていますが、1ha当たりの農業産出額は2位となっており、耕地面積に対して農業産出額が多い高付加価値な農業経営となっています。

松戸産農産物ブランドシンボルマーク「みのりちゃん」を活用して、安全・安心な農産物、環境にやさしい農業^(注)を推進しており、松戸産農産物のブランド化に取り組んでいます。「矢切ねぎ」、「あじさいねぎ」は、松戸市を代表するブランド農産物となっており、市場からも高い評価を得ています。また、「あじさいねぎ」を使用した加工品が開発されるなど、6次産業化^(注)の取組みも行われています。近年は、千葉県内でも有数の生産量である「えだまめ」のブランド化に取り組み、生産量が増加しているほか、梨、ほうれんそう、キャベツ、かぶ、だいこん、トマト、いちごなど、様々な農産物が生産されています。

【東葛飾地域の耕地面積と農業産出額】

区分	H29耕地面積 (ha)	市面積に対する 耕地面積 (%)	販売農家一戸 当たりの耕地面積 (ha)	H28農業産出額 (億円)	耕地面積1ha 当たりの農業産出額 (万円/ha)
松戸市	740	12.1%	1.03	64.4	870
市川市	532	9.3%	1.07	42.6	801
船橋市	1,230	14.4%	1.24	103.5	841
野田市	2,640	25.5%	1.41	75.7	287
柏市	2,580	22.5%	1.82	103.4	401
流山市	423	12.0%	0.96	22.9	541
我孫子市	1,240	28.7%	1.78	23.2	187
鎌ヶ谷市	449	21.3%	1.20	40.6	904

※耕地面積：平成29年耕地面積統計のデータを使用

※販売農家^(注)数：農林業センサス^(注)（農林水産省）統計データを使用

※農業産出額：平成28年市町村別農業産出額（推計）のデータを使用

※浦安市には農地がないため、グラフの区分に含めない

(注) 参考資料 1. 用語の説明

(2) 松戸市の各地区の特徴

松戸市の農業地区を大別すると、下記の6つの地区があります。各地区の特徴と主な農産物を下表にまとめます。

【各地区の特徴と主な農産物】

地区名	地区の特徴	主な農産物
小金地区	本土寺や小金城址など、多くの歴史資源を有する地域です。江戸時代から宿場町として栄え、駅前の商業化が進んでいます。一方で、優良な農地も広く残っており、あじさいねぎの栽培やいちごの施設栽培が盛んです。	あじさいねぎ えだまめ いちご
明・六和地区	食料品製造業、飲料製造業などの工場が立地し、県内でも有数の内陸工業団地です。江戸川沿いの低地部では水田が広がり、多くの農地が残されています。	ほうれんそう えだまめ 米
矢切地区	江戸川や坂川沿いの区域には水田が広がっています。また、矢切ねぎを特産とし、優良な農地が残されています。低地部と台地部の境に長く連なる斜面林は、地域の貴重な自然資源であるとともに、本市を代表する景観にもなっています。	矢切ねぎ キャベツ 米
常盤平地区	地域の北西には斜面林がまとまって残り、周辺の21世紀の森と広場や農地とともに自然豊かな地域です。さくら並木やけやき並木など街路樹が立派に成長し、春には、常盤平さくらまつりが開催されるなど、市民の憩いの空間となっています。	ねぎ かぶ えだまめ
東部地区	地形は概ね台地状で、一部市街化区域を除いて大部分が自然的な土地利用がされています。南側の高塚新田では、梨もぎができる観光梨園が集積しており、本市の重要な観光資源にもなっています。	梨 ねぎ かぶ えだまめ トマト
五香・六実地区	地域の南側には梨園を中心とした農地が広がり、市街化区域には生産緑地地区 ^(注) が点在するなど、多くの農地が残されています。	梨 ねぎ いちご だいこん

【かぶ】



【ほうれんそう】



(注) 参考資料 1. 用語の説明

【トマト】



【いちご】



【松戸市で生産される主な農産物と農業地区】



※とうかつ中央農業協同組合よりデータ提供

(3) 松戸市の主な農産物

①矢切ねぎ ※地域団体商標^(注) (2007年)

矢切地区で生産されている“ねぎ”で、1870年頃（明治3年）から栽培されています。今の東京都江東区砂町から「千住ねぎ」の種を譲り受け栽培したところ、江戸川が洪水で氾濫したときに、上流から運ばれた砂と土がちょうどよく混ざり栽培に適していたことから、年々作付けも増えて1880年頃（明治13年）からは市場へ出荷されるようになりました。1917年（大正6年）には、矢切葱採種組合が結成され、優良品種の採種に成功し、その種子を出荷するようになり、種子の販売地としても全国に知られるようになりました。矢切ねぎの特徴は、白身が長く、太く、旨味があり「焼いてよし、鍋でよし」と言われる高級ねぎです。

【矢切ねぎ】



【矢切ねぎの栽培風景】



②あじさいねぎ ※登録商標^(注) (2004年)

小金地区で生産されている葉ねぎで、1975年以降（昭和50年代）に本格的に生産されるようになりました。生産地にある紫陽花で有名な本土寺（あじさい寺）にちなんで「あじさいねぎ」と名付けられました。味わい深く、彩りが鮮やかなことから「味彩（あじさい）ねぎ」と呼ぶ人もいます。あじさいねぎの特徴は、葉色が濃く、白身にも冴えがあり、シャキシャキとした食感、やわらかさ、深い香りと辛味が特徴です。どんな食材にも合うので、多彩な料理に使用できることや加工品も販売されています。

【あじさいねぎ】



【あじさいねぎの栽培風景】



【加工品の例（ドレッシング）】



(注) 参考資料 1. 用語の説明

③松戸の梨

松戸市は明治時代から梨の特産地で、二十世紀梨の原産地として知られています。二十世紀梨は1888年（明治21年）に、八柱村（今の松戸市大橋）の松戸覚之助少年（当時13歳）が親類の家のごみ捨て場で偶然見つけた苗木を育て、10年後に収穫に成功したものです。現在、市内では幸水、豊水、あきづき、かおりなど、多数の品種が栽培されています。8月中旬から10月中旬頃まで収穫することができ、毎年観光梨園には、みずみずしい梨を求めて、たくさんの家族連れや団体が訪れ、賑わいます。

また、毎年8月（2018年で35回目）に、市内の梨団体（松戸市観光梨園組合連合会、松戸市梨研究会）より、松戸のおいしい梨100箱が松戸市に寄付され、市内の福祉施設に旬の味覚を届けています。

【梨100箱寄付の様子】



【松戸の梨の栽培風景】



④松戸えだまめ

松戸市は、県内でも有数の枝豆生産地です。市内全域で、茶豆系、青豆系の多品種の枝豆が積極的に栽培されています。市では、安全・安心な枝豆の生産と供給を拡大するため、ブランド化を推進しています。枝豆の生産技術の向上とおいしさを追求していき、消費者に「松戸産の枝豆だから」と選ばれることを目指しています。また、出荷規格、鮮度管理、生産管理等の一定の基準を満たした松戸産の枝豆を「松戸えだまめ」と呼んでいます。2017年に、推奨マークが作成され、出荷袋に添付してPRをしています。

【推奨マーク】



【松戸えだまめ】



【松戸えだまめの栽培風景】



(4) 松戸市の農業の歴史

松戸市は、水戸街道の宿場町や舟運交通の要衝として栄えてきました。明治時代には、まだ江戸時代の風景が広がっていましたが、1882年頃からねぎ、なす、だいこん等、野菜類^(注)の栽培が急速に伸びていきました。矢切地区のねぎが、東京で優良品として評価され栽培が盛んになり、「矢切ねぎ」の黎明期となったほか、1904年には、松戸市で発見された新種の梨が「二十世紀梨（にじっせいきなし）」と命名され全国に普及するなど、東京の近郊農村へと発展しました。1943年には、松戸町と高木村、馬橋村が合併し、松戸市が誕生しました。

第二次世界大戦の終結後、軍用地は開拓地となり、松戸市でも区画整理が進んでいきました。1955年に、新京成電鉄の松戸―津田沼間が開通し、1960年に常盤平団地の入居が始まりました。1969年には、小金原団地に入居が始まりました。1971年には、常磐線が複数線化し、現在の東京メトロ千代田線と相互乗り入れが開始されました。1973年には、人口約30万人となりました。

農地は住宅地となり、交通網が整備され、東京の近郊農村から住宅都市に発展しています。このような影響により、経営耕地面積^(注)は、1960年2,967haから、2000年783haまで減少し、総農家数は、1960年3,033戸から2000年1,039戸まで減少しています。



※上記グラフは、統計データをもとに作成しており、総農家数及び経営耕地面積について、定義が異なる可能性があります。1960年以降の総農家数と経営耕地面積の推移傾向の把握のため作成しました。

※各年、松戸市統計資料、農林業センサス^(注)（農林水産省）統計データより

(注) 参考資料 1. 用語の説明

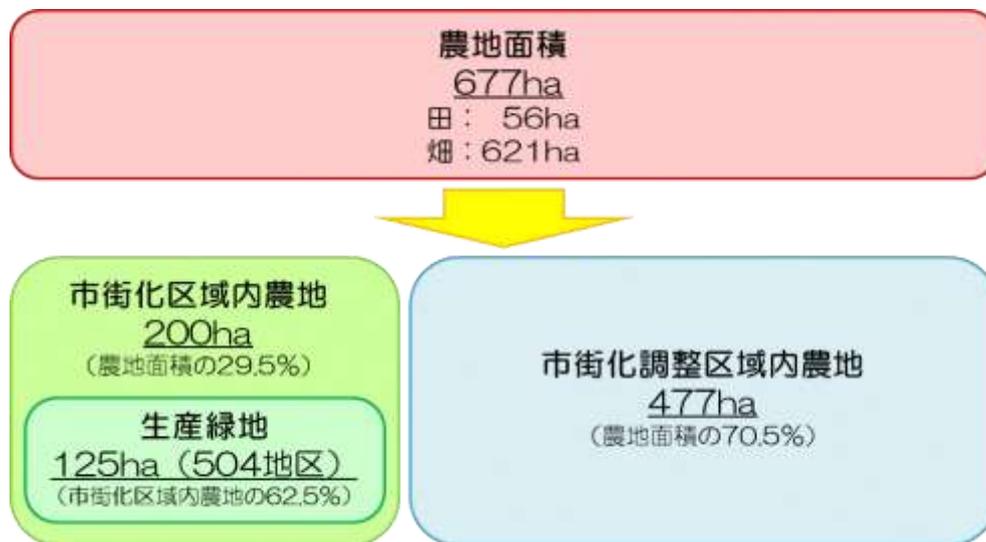
(5) 農地

①松戸市の農地の概要

松戸市の農地面積は677haとなっており、田56ha、畑621haとなっています。市街化調整区域内農地^(注)が477ha、市街化区域内農地^(注)が200haです。

市街地（市街化区域）において、農地として保全していくことが定められた生産緑地^(注)については、125ha・504地区（2018年）となっています。2022年以降、30年間の営農義務を終える生産緑地については、指定の解除が可能となり宅地化が進むことも考えられます。

【松戸市の土地利用状況】



※平成30年度固定資産概要調書/松戸市みどりと花の課統計資料より

【用語の説明】

市街化区域	すでに市街地を形成している区域及び、概ね10年以内に優先的かつ計画的に市街化を図るべき区域です。
市街化調整区域	市街化を抑制すべき区域として、都市施設の整備も原則として行われない区域です。
生産緑地	市街化区域内の農地を対象に、良好な都市環境を形成することを目的として、今後も、農地としてあるべきと指定した農地です。

※農地とは、土地の登記の地目が田や畑の松戸市内の土地のことで、経営耕地面積^(注)とは、松戸市の農業経営体が経営している耕地のため、農地と経営耕地面積は異なる数値となっています。

(注)参考資料 1. 用語の説明



※固定資産概要調書/松戸市みどりと花の課統計資料より

②経営耕地面積について

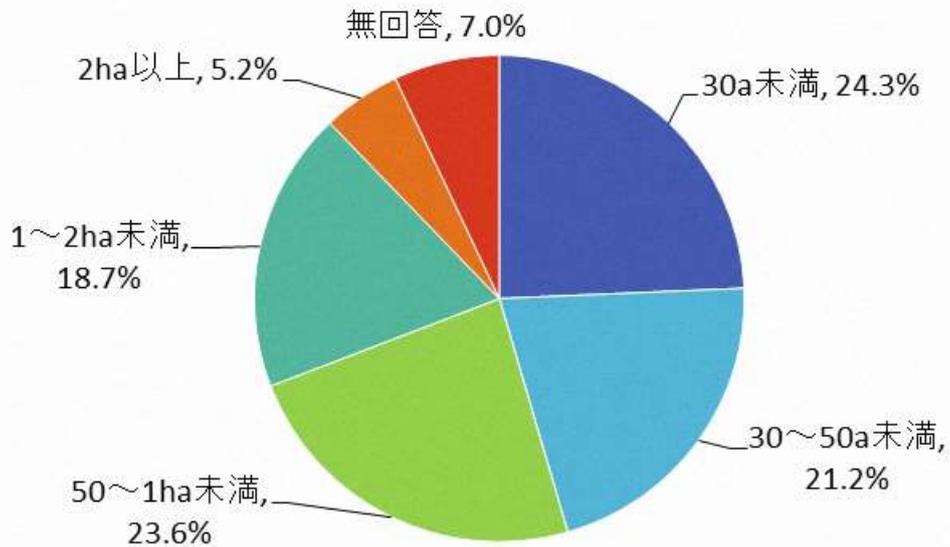
松戸市の経営耕地面積^(注)の状況は、畑401ha（2015年）、田94ha（2015年）、樹園地70ha（2015年）となっています。経営耕地面積の推移は、685ha（2005年）から565ha（2015年）と10年間で120ha（17.5%）減少しています。都市農業に関する農業者アンケート調査によると、現在の経営耕地面積は、「30a未満」・「30～50a未満」が45.5%となっており、10年後の経営耕地面積についても「縮小」が56.3%と、今後も農地の減少及び経営耕地面積の縮小化が進んでいくと考えられます。



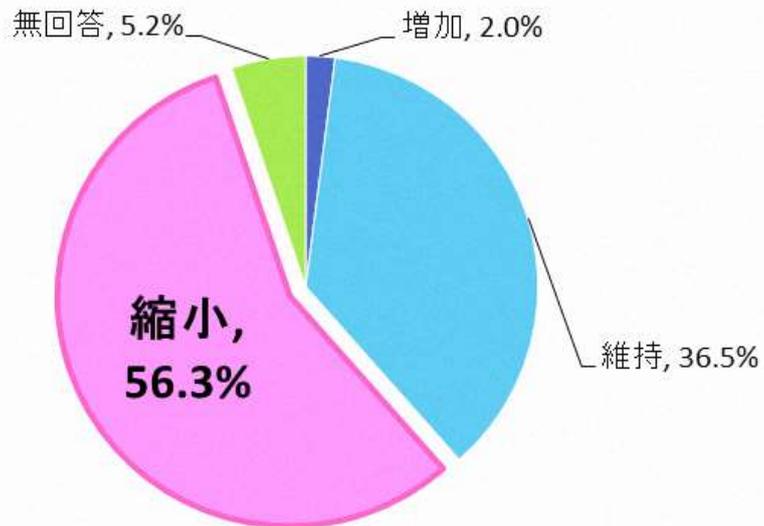
※農林業センサス^(注)（農林水産省）統計データより

(注)参考資料 1. 用語の説明

経営耕地面積について(n=444)



10年後の経営耕地面積について(n=444)



※都市農業に関する農業者アンケート調査^(注)結果より

(注)参考資料 2. アンケート調査概要

(6) 担い手

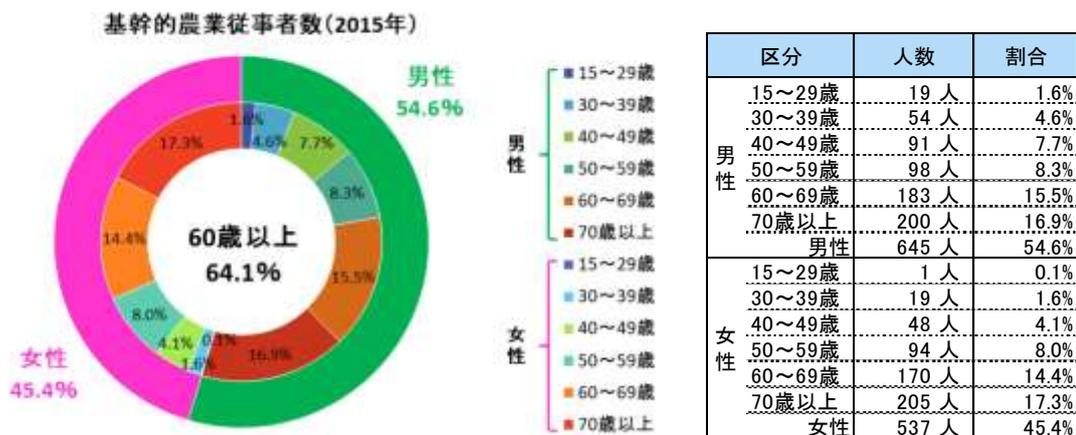
①松戸市の農業者の概要

松戸市の総農家数は、906戸（2005年）から768戸（2015年）と、10年間で138戸（15.2%）が減少しています。そのうちの販売農家^(注)について見ると、その減少率（2005年～2015年）は、24.3%と総農家数の減少率以上に高く、担い手の確保・育成が農業を継続していくためには重要です。

次に、基幹的農業従事者^(注)数については、60歳以上の農業従事者が男女計で64.1%（男32.4%、女31.7%）となっており、農業者の高齢化が進んでいます。



※農林業センサス^(注)（農林水産省）統計データより



※農林業センサス（農林水産省）統計データより

(注)参考資料 1. 用語の説明

②地域の意欲のある担い手への支援について

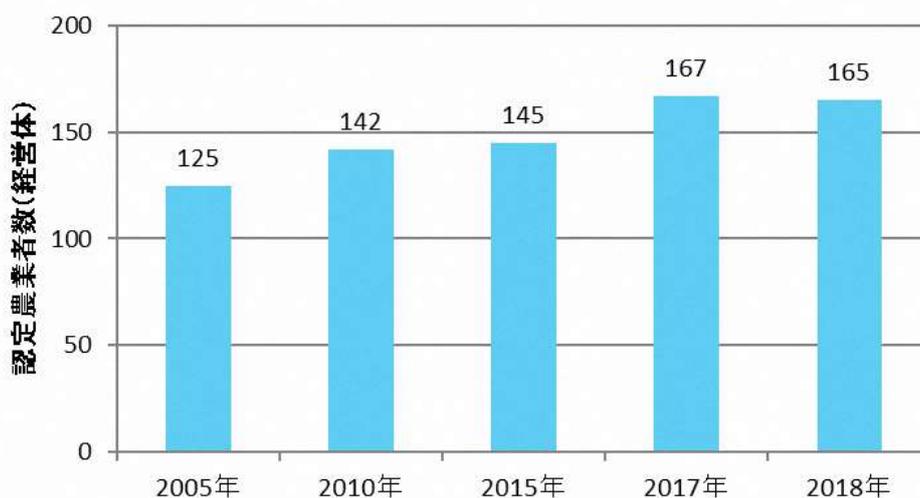
農業が職業として選択し得る魅力とやりがいのある産業となるように、また意欲ある担い手の確保・育成を図るため、認定農業者制度があります。この制度は、農業経営の発展目標を明確にして、自らの創意工夫に基づき、経営の改善を進めようとする計画を市町村が認定し、これらの認定を受けた農業者に対して重点的に支援措置を講じようとする制度です。

松戸市の認定農業者^(注)数は、165経営体（2018年5月時点）となっています。認定農業者は、地域における将来の農業経営の担い手として位置付けられた農業者であり、自らの農業経営の発展目標（5年後の経営目標）を明らかにするために、5年間の経営改善計画を作成し、計画的な農業経営に取り組んでいる農業者です。

具体的な経営目標は、年間農業所得（一経営体当たり）550万円以上、年間労働時間（農業従事者一人当たり）2,000時間以下の水準を目標としており、松戸市では、松戸市都市農業振興協議会^(注)で、農業計画の認定審査を実施しています。認定を受けてから5年経過した場合、再度計画を提出し、再認定を受けないと認定農業者の資格を失います。

認定を受けると、農用地の利用集積^(注)の支援、無利子・低利資金融資、農業機械等の導入支援や、経営管理向上などの研修会等の支援を受けることができます。

松戸市の認定農業者数の推移



※千葉県農林水産部担い手支援課調べ

(注)参考資料 1. 用語の説明

③新規就農者と農業後継者について

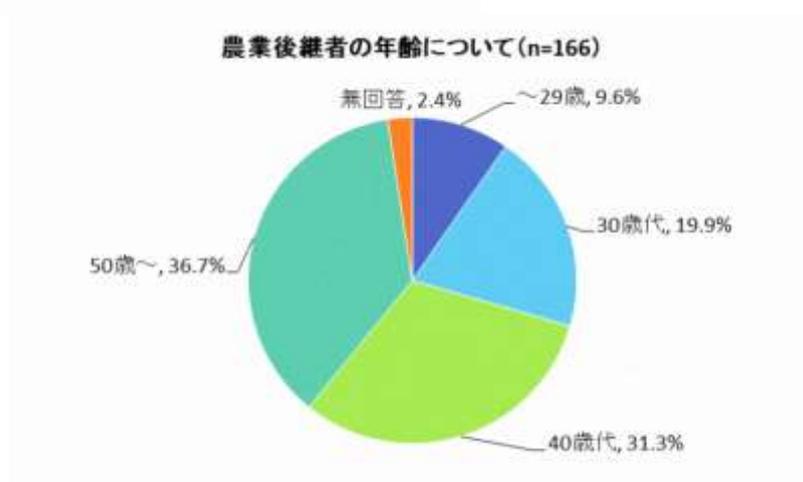
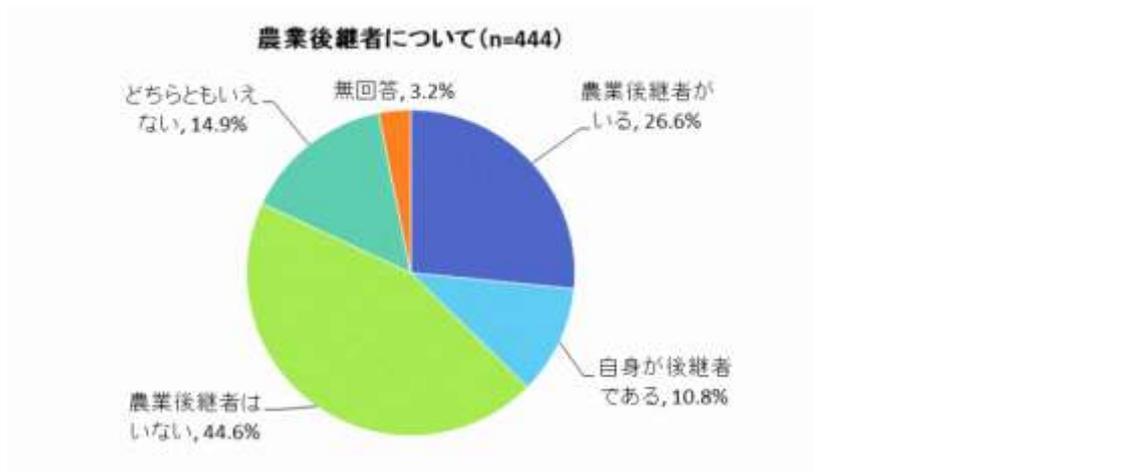
新規就農者は、親元就農^(注)が中心ですが、2016年、2017年と新規参入^(注)と雇用就農^(注)が見られます。

農業者へのアンケート結果では、「農業後継者がいる」・「自身が後継者である」を合わせると、37.4%の農家世帯に農業後継者が存在します。また、それらの農業後継者の年齢は、「50歳以上」が36.7%と最も多く、「30歳代」・「40歳代」が51.2%となっています。

【新規就農者数について】

項目	2014年	2015年	2016年	2017年
新規就農者	4人	3人	3人	2人
(内訳)	雇用就農			1人
	新規参入		1人	1人
	親元就農	4人	3人	2人

※2017年度千葉県東葛飾農業事務所新規就農者実施調査データより



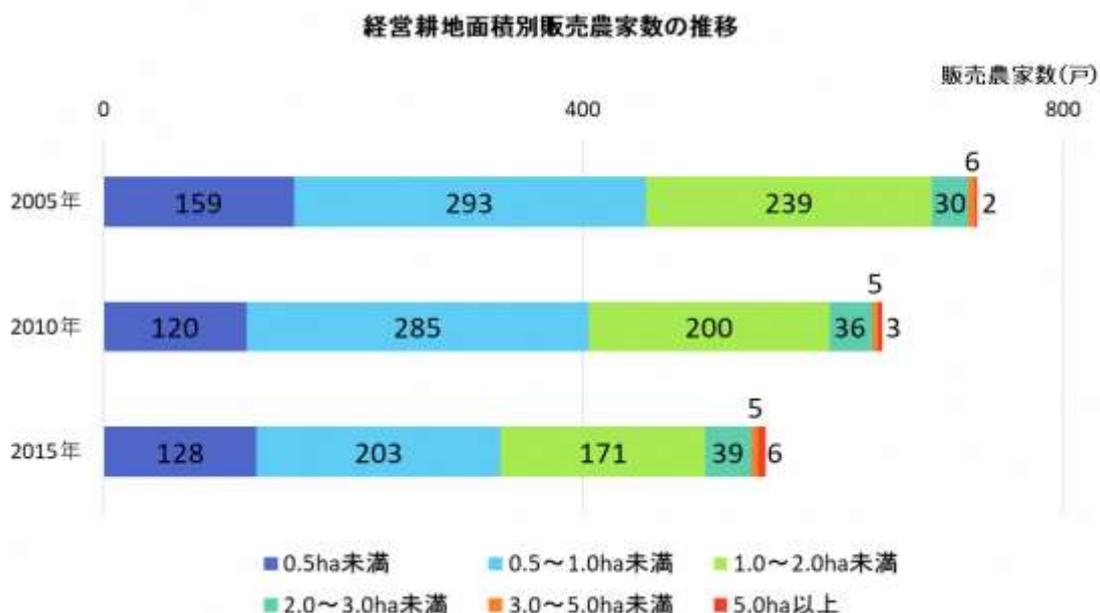
※都市農業に関する農業者アンケート調査結果より

(注) 参考資料 1. 用語の説明

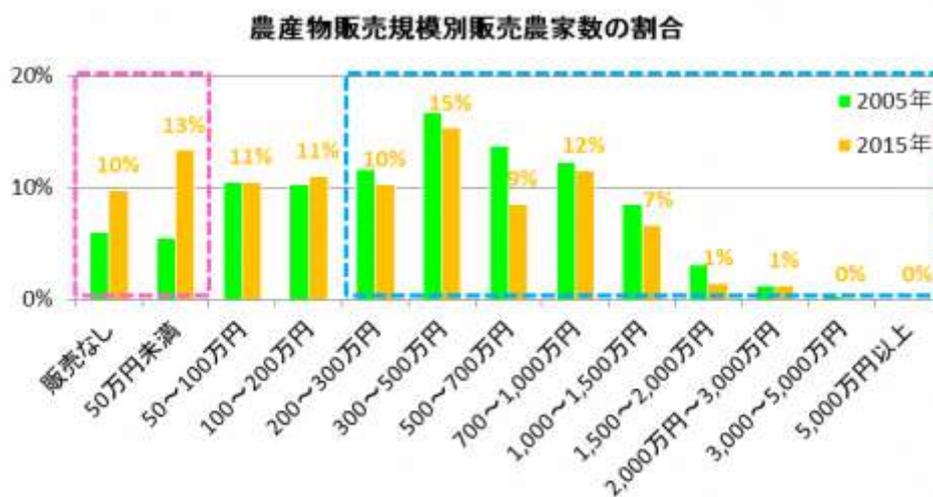
④販売農家の経営規模について

経営耕地面積^(注)別の農家数は、0.5haから2.0ha未満の農家で減少が見られます。農業経営をしていく上では、良好な営農条件を備えた農地を持つことは、経営の安定化につながります。

農産物販売規模別農家数の割合は、2005年から2015年で販売金額200万円以上の農家割合が減少し、50万円未満・販売なしの農家割合が増加する傾向となっています。



※農林業センサス^(注)(農林水産省)統計データより



※農林業センサス(農林水産省)統計データより

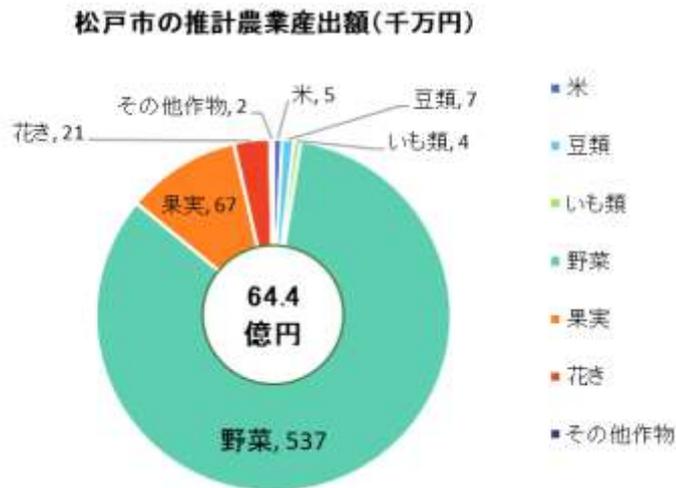
(注)参考資料 1. 用語の説明

(7) 生産物・販売

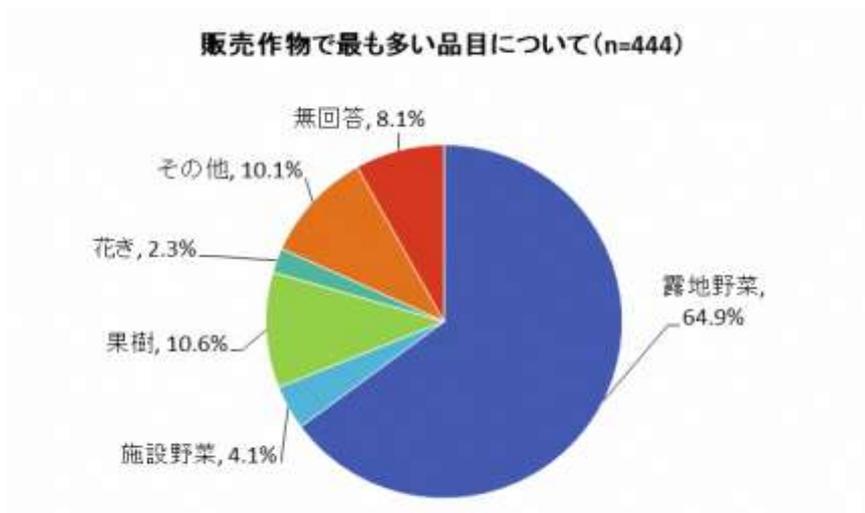
①松戸市の生産物の概要

松戸市の農業者において、販売作物で最も多い品目は、露地野菜64.9%、果樹10.6%、施設野菜4.1%となっており、農業産出額からもわかるとおり、野菜、果実の生産が盛んに行われています。

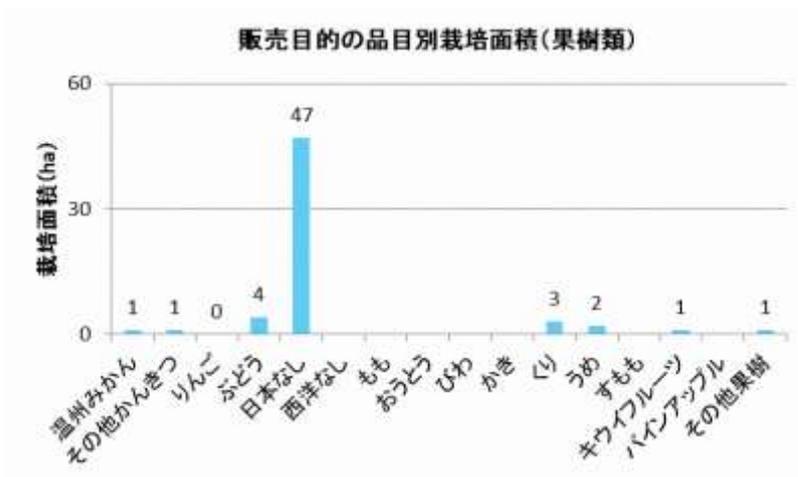
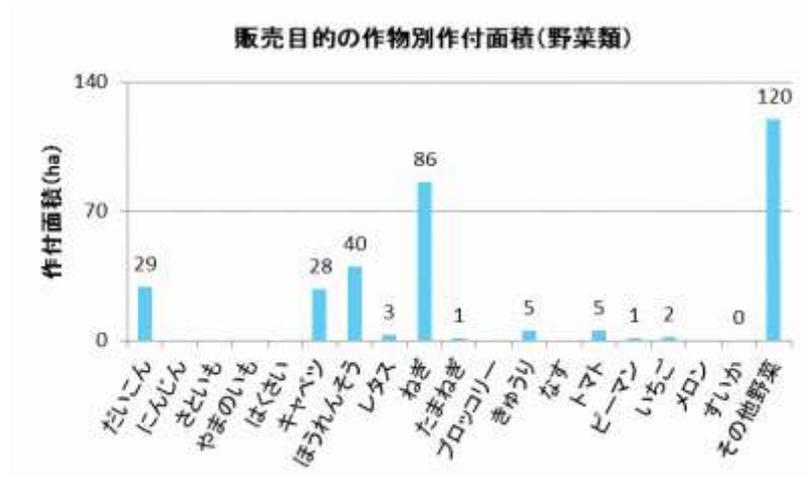
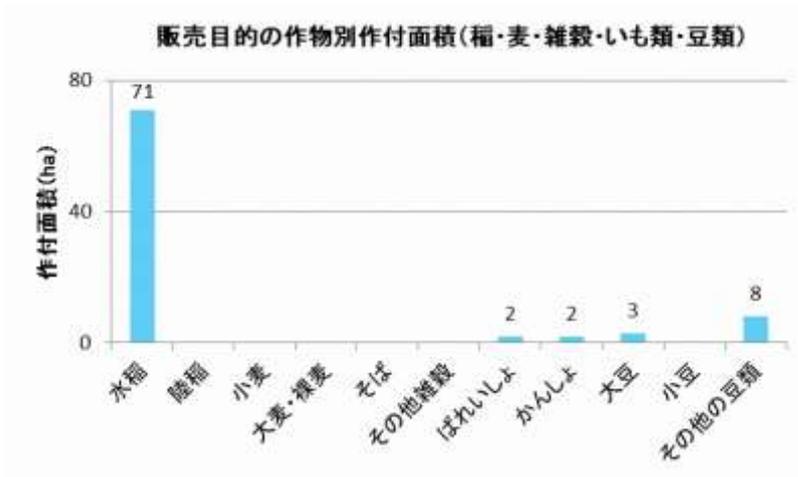
松戸市の推計農業産出額は64.4億円であり、その内の主要農産物から見ると、ねぎ、かぶ、だいこん、えだまめなどの野菜で53.7億円となっています。販売目的の作物別作付面積を見ると、その他野菜が120haと最も多く、次いで、ねぎ86ha、水稻71ha、日本なし47ha、ほうれんそう40haとなっています。



※2016年市町村別農業産出額(農林水産省)より



※都市農業に関する農業者アンケート調査結果より



※2015年農林業センサス^(注)(農林水産省)統計データより

「0」: 1haに満たない栽培面積を示す

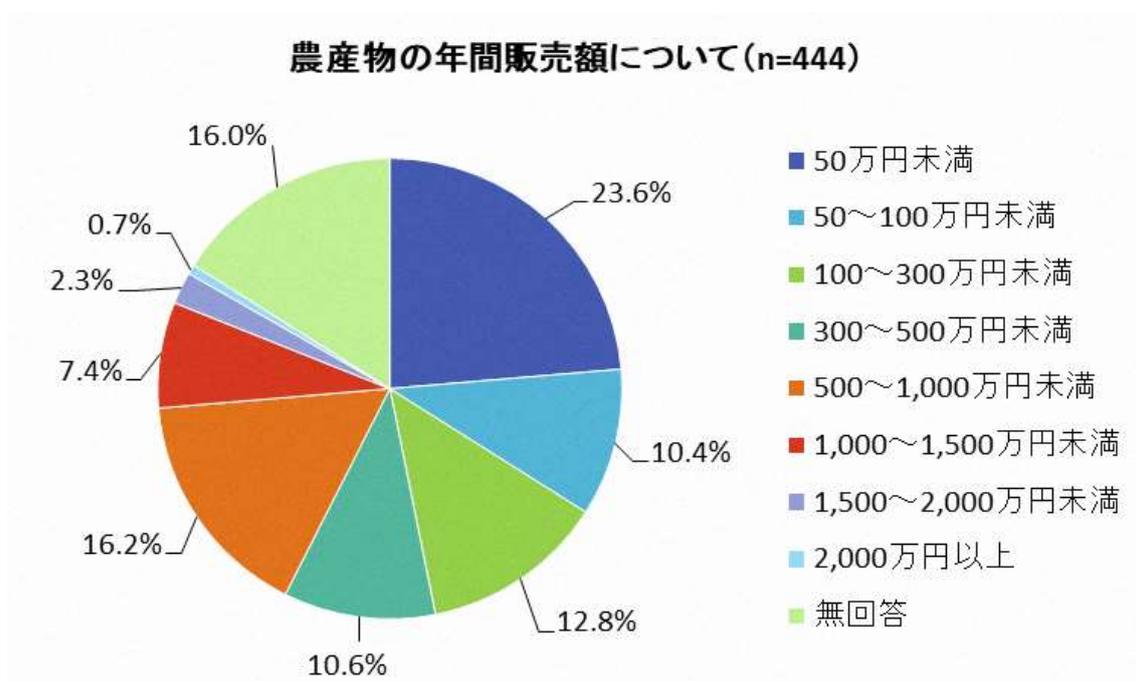
「」: 調査は行ったが事実のないもの、事実不詳又は調査を欠くもの、統計数値を公表しないものを示す

(注)参考資料 1. 用語の説明

②生産物の販売状況について

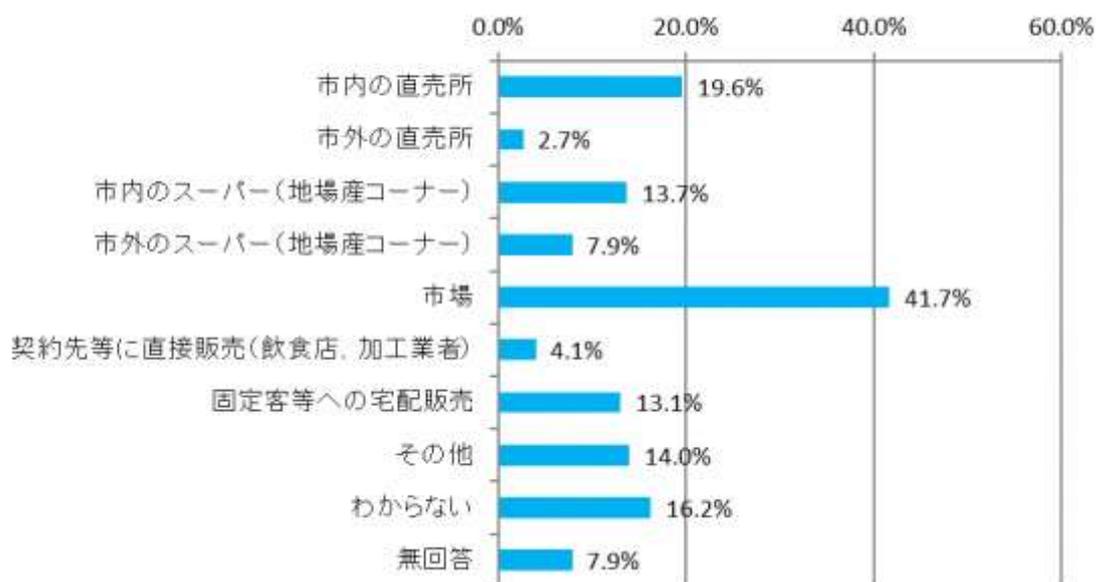
都市農業に関する農業者アンケート調査結果によると、農産物の年間販売額は、500万円未満の農業者が57.4%となっています。

現在の主な出荷先としては、「市場」が41.7%と最も高くなっていますが、次いで、「市内の直売所」が19.6%、「市内のスーパー」が13.7%と、地産地消に農業者が力を入れてきています。市民アンケート調査結果では、食材を購入する場所として、「スーパーマーケット」が96.6%となっています。



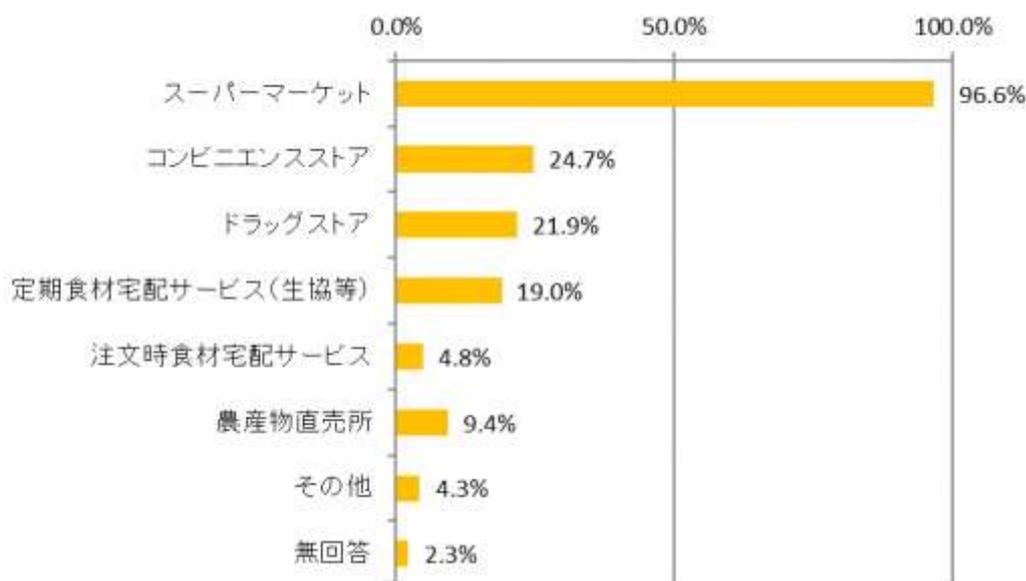
※都市農業に関する農業者アンケート調査結果より

現在の主な出荷先について(n=444)



※都市農業に関する農業者アンケート調査結果より

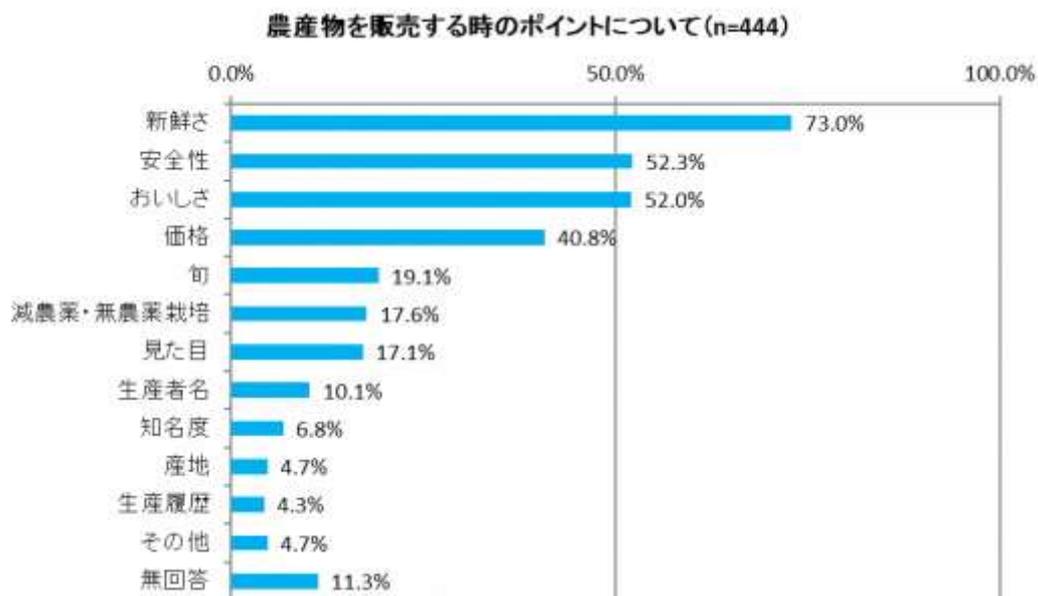
食材を購入する場所について(n=352)



※都市農業に関する市民アンケート調査結果より

③農産物販売におけるポイント

農産物を販売・購入する時のポイントについては、都市農業に関する農業者アンケート調査結果によると「新鮮さ」が73.0%と高くなっており、市民アンケート調査結果では、「新鮮さ」が83.5%となっています。農業者及び市民ともに、地産地消の推進に適した考え方をしています。



※都市農業に関する農業者アンケート調査結果より



※都市農業に関する市民アンケート調査結果より

④農産物の鳥獣被害

2014年度の鳥獣被害が、被害量19.5t、被害金額4,736,000円となっています。カラスを筆頭に鳥被害が多くなっていますが、タヌキやハクビシン等の獣被害も発生しています。鳥獣被害は農業経営を圧迫する要因になるため、農業者が設置するカラス等の防除用資材費に対する補助を松戸市で、松戸市都市農業振興協議会^(注)が行う、タヌキ・ハクビシン等の捕獲用箱わなの貸出しや捕獲した鳥獣の処分に対する補助を、松戸市及びとうかつ中央農業協同組合で実施するなど、対策を行っています。

【松戸市における鳥獣被害の状況】

被害面積	6.5 ha
被害量	19.5 t
被害金額	4,736,000 円
・ 鳥類	3,779,000 円
・ 獣類	957,000 円

※松戸市農政課「農業者向け調査結果」(2014年4月~2015年3月)より

【鳥獣被害対策効果の試験】



※トウモロコシ畑等で、防鳥糸や防鳥網を使用した効果試験を実施し鳥獣被害への対策を検討しています。

(注)参考資料 1. 用語の説明

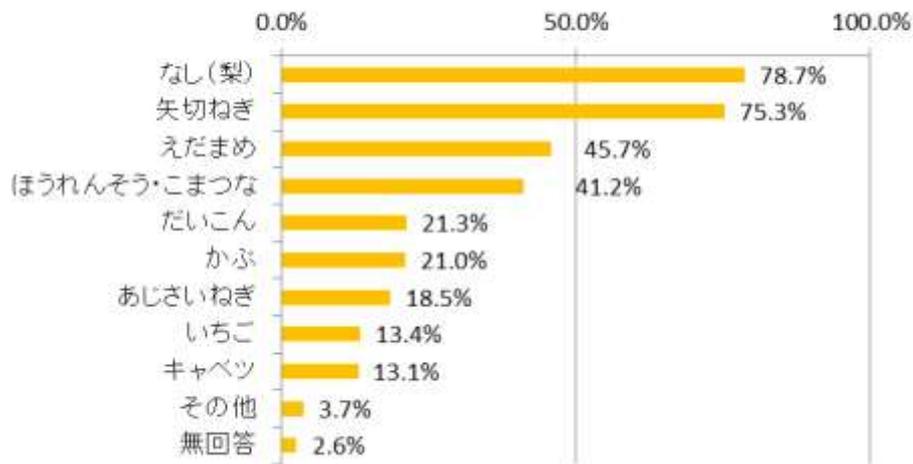
(8) 農業者と市民の交流

①市民における松戸市の農業に関する認知度

都市農業に関する市民アンケート調査結果によると、松戸市の主な農産物の認知度は、「なし(梨)」78.7%、「矢切ねぎ」75.3%と高く、多くの市民に認知されています。

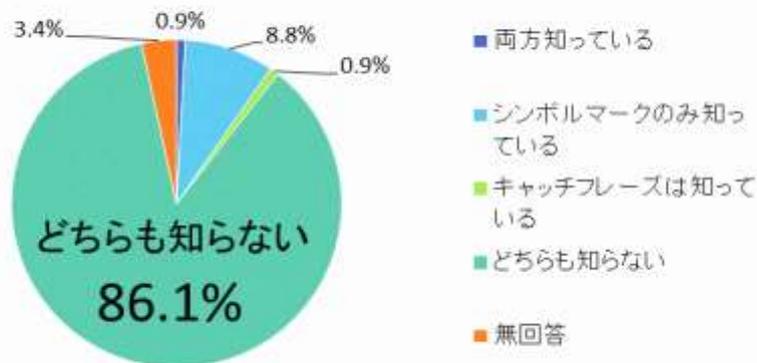
しかし、松戸産農産物のシンボルマーク「みのりちゃん」とキャッチフレーズ「松戸いきいき地場野菜・果実」については、「どちらも知らない」が86.1%と、認知度が不足しています。

松戸市の主な農産物として知っているものについて(n=352)



※都市農業に関する市民アンケート調査結果より

「みのりちゃん」「松戸いきいき地場野菜・果実」の認知度について(n=352)

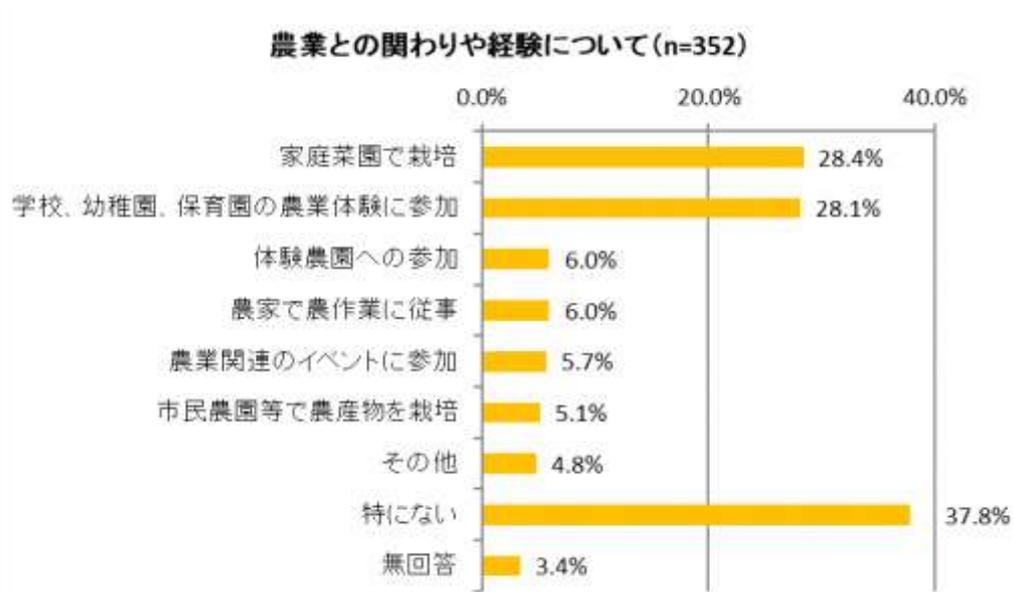


※都市農業に関する市民アンケート調査結果より

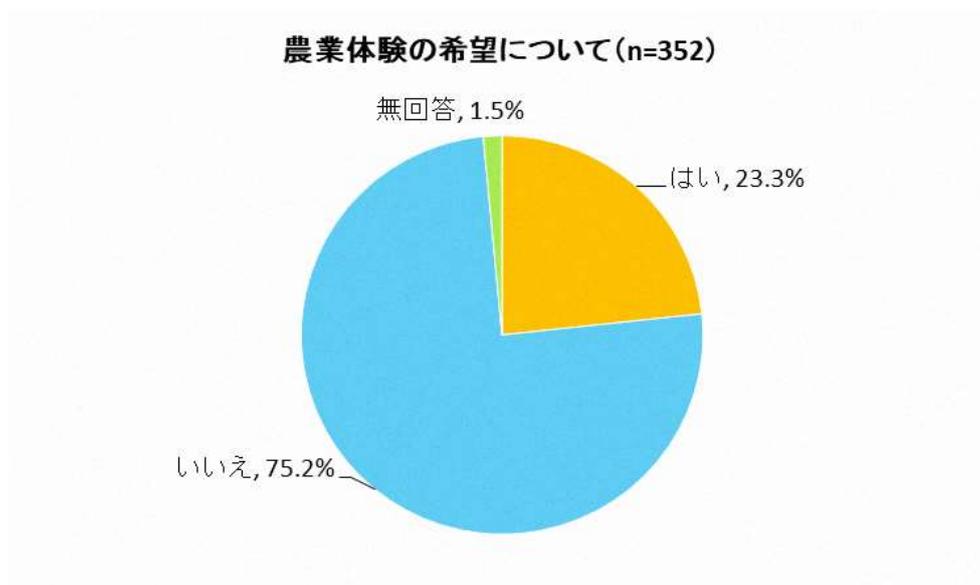
②市民における「農業」との関わりについて

都市農業に関する市民アンケート調査結果によると、農業との関わりや経験のある市民は、58.8%となっています。具体的には、「家庭菜園で栽培」が28.4%、「学校、幼稚園、保育園の農業体験に参加」が28.1%となっています。

一方で、農業体験の希望については、「はい」が23.3%となっており、農業体験を希望する市民が少ない状況です。



※都市農業に関する市民アンケート調査結果より



※都市農業に関する市民アンケート調査結果より

③市民が「農業」と関わることができる機会

【農産物等と触れ合えるイベント】

まつど大農業まつり	緑と花のフェスティバル
<p>秋の収穫祭であるまつど大農業まつりは、自然の恵みに感謝して、「農」を身近に感じてもらい、都市農業に親しんでもらうイベントです。毎年 11 月 23 日勤労感謝の日に、主催とうかつ中央農業協同組合、共催松戸市で開催しています。</p> <p>2008 年から開催し、2018 年開催時の来場者数は、同時開催のイベントと合わせて約 28,000 人と大規模なお祭りです。</p>	<p>自然に親しみ緑の恩恵に感謝し、豊かな心をはぐくむことを目的として、市民・緑化関係団体・行政が一体となり、毎年みどりの月間に 21 世紀の森と広場で開催する緑の祭典です。</p> <p>1989 年から開催し、2018 年開催時の来場者数は約 14,300 人と大勢の方が植木・花・野菜などの買い物を楽しめます。</p>

【農作業体験ができる施設】

観光農園	オーナー農園
<p>東京に近いというメリットを生かして、観光客に農産物の収穫を体験してもらいます。松戸市では梨、ぶどう、ブルーベリー、いも掘りなどが盛んです。新鮮な果物、野菜を収穫し、農業者とも顔の見える交流ができます。</p> <p>梨の直売や梨もぎができる松戸市観光梨園組合連合会加盟園が、51 園あります。</p>	<p>野菜の生育を楽しみながら、ほうれんそうや、えだまめの収穫体験ができます。</p> <p>2018 年度に松戸市都市農業振興協議会が実施したオーナー農園では、748 人、847 区画の申込みがありました。</p>
市民農園	体験農園
<p>松戸市では、農地所有者と農園を利用する皆さんが、直接契約を結び農地を利用する市民農園が多くあります。高齢者のいきがづくり、生徒・児童の体験学習などの多様な目的で利用されています。松戸市市民農園連絡協議会に加盟している市民農園が2018年4月時点で24か所、2,165区画あります。</p>	<p>実際に農業者の指導を受けながら、自ら種まきから収穫までの一連の農作業を行うことができます。市では、短期間の体験農園を農業者に協力してもらい、実施しています。また、農業者が行う体験農園も実施されています。</p> <p>2018 年度に松戸市都市農業振興協議会^(注)が実施した体験農園では、22 人、28 区画の申込みがありました。</p>

(注) 参考資料 1. 用語の説明

【小学校での農業に関わる体験や学習】

水田や梨園での農業体験

小学校での農業に関わる体験や学習の例として、以下の取り組みがあります。

（矢切小学校）

協力農業者の指導を受けながら、全児童が稲の田植えから収穫まで行います。この「全校田植え」は、高学年が低学年をサポートし、普段体験できない田んぼの感覚を楽しみ取り組むとともに、受け継がれる伝統行事となっています。

（高木小学校）

3年生の児童は、梨園を見学し、梨の栽培について教わります。5年生の児童は、稲の田植えから収穫まで、一生懸命に泥だらけになりながら、取り組みます。協力農業者の方々の指導を受け、児童の貴重な体験の機会となっています。

（大橋小学校）

「大橋小学校の伝統を守る」をスローガンに、4年生の児童が、協力梨農業者の方々に、二十世紀梨の収穫までの一連の栽培について教わり、育てています。収穫を迎え、お世話になった方々に感謝するとともに、3年生への梨の引き継ぎ式を行い、次の世代に伝統を受け継いでいきます。

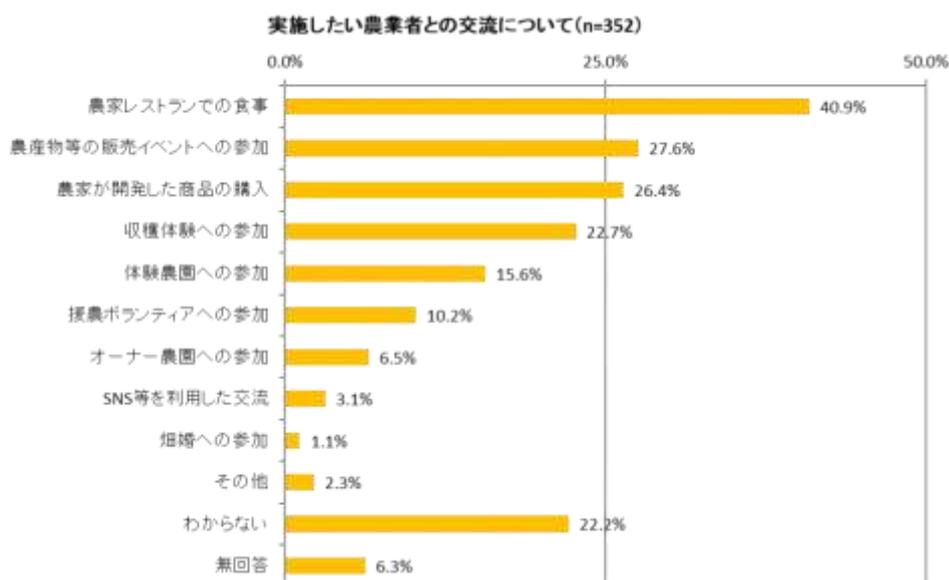
（六実地区の小学校）

地域の協力梨農業者の方々に指導を受けながら、梨の花粉づけや摘果の仕方を教わり、梨を育てています。梨の実が順調に育つ頃、実に袋かけ作業を行い、梨の収穫までの一連の栽培体験に取り組んでいます。お世話になった方々に感謝するとともに、地域の梨を次の世代に受け継いでいきます。

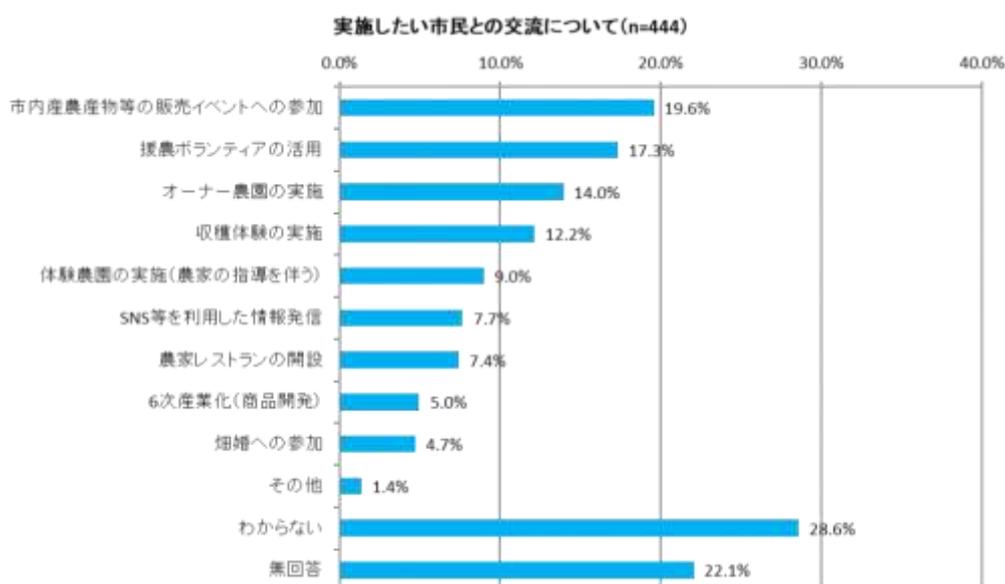
④市民における「農業者」との交流について

都市農業に関する市民アンケート調査結果によると、農業者との交流内容について、「農家レストラン^(注)での食事」が40.9%と最も高く、次いで20%を超えている項目は、「農産物等の販売イベントへの参加」、「農家が開発した商品の購入」、「収穫体験への参加」となっています。

農業者アンケート調査結果によると、「市内産農産物等の販売イベントへの参加」が19.6%となっています。



都市農業に関する市民アンケート調査結果より



※都市農業に関する農業者アンケート調査結果より

(注)参考資料 1. 用語の説明

⑤農業に関する市民からの相談

都市農業を展開する松戸市においては、住居地と農地が近く、農業者の住民への配慮と、住民の農業への理解を醸成することが欠かせません。農業に関する市民からの相談件数は、2014～2017年の間で、平均55件/年程度となっています。焼却・煙・野焼きの相談件数は、近年増加傾向となっています。一方、土砂流出については、減少しています。

【相談内容と件数】

項目	2014年	2015年	2016年	2017年
相談件数	53	56	51	61
土砂流出	25	18	11	12
雑草	13	9	5	15
焼却・煙・野焼き	2	8	5	13
土埃	2	3	5	7
虫の大量発生	0	4	0	1
農薬	3	1	0	1
野菜残さ・堆肥の臭い	4	3	6	3
その他	4	10	19	9

※松戸市農政課統計資料より

3. 松戸市の農業の課題

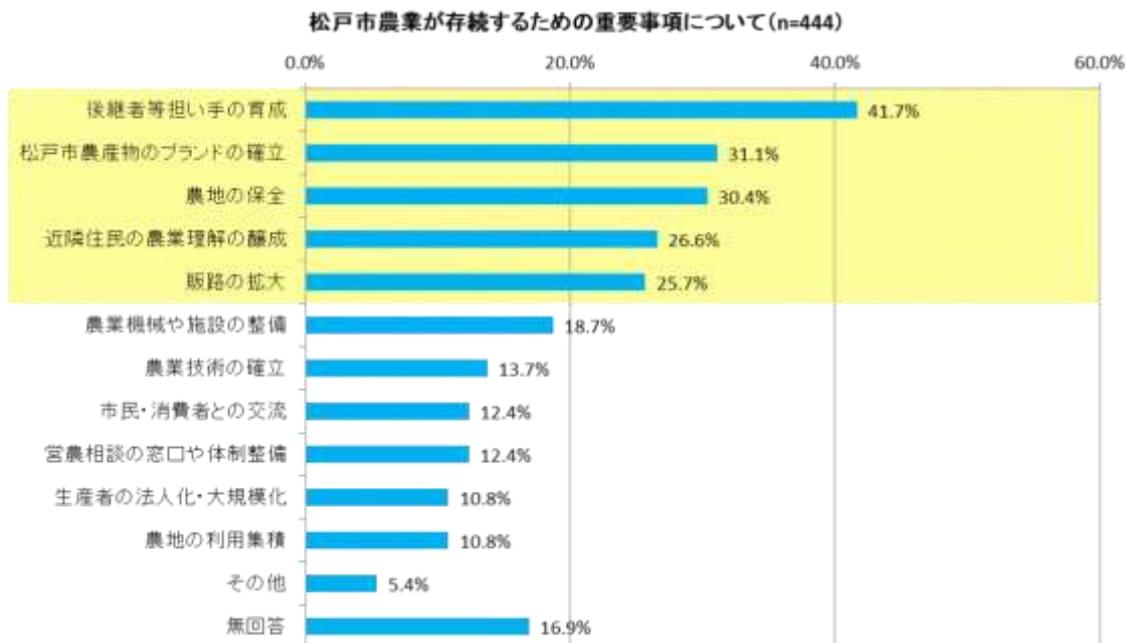
現代社会においては、農業以外にも多くの選択可能な職業があるほか、農産物価格の低迷等が農業経営を不安定にしており、このような背景が、担い手減少の原因となっています。さらに、担い手が減少することで、耕作することができなくなり、農地の減少にもつながっています。また、都市農業においては、都市化により、農地と近隣住民との距離が近く、近隣住民の理解が得られなければ、農業を継続していくことが難しくなっていきます。

このような状況の中、松戸市の農業を存続させていくためには、安定して収益を得られる農業を実現し、生業として農業に取り組める環境を整備していくことが必要になります。また、農業者及び市民が、都市農地は「都市にあるべきもの」と認識し、都市農業を理解することが重要になります。

都市農業振興基本法は、都市農業の安定的な継続と良好な都市環境の形成を図ることを目的に策定されました。そのためには、「新鮮な農産物の供給」、「都市住民の農業への理解の醸成」、「農業体験・学習、交流の場」、「良好な景観・生活環境の形成」、「生きがい・機能回復の場」、「災害時の防災機能」である、都市農業の多様な機能を発揮する必要があります。これら多様な機能を発揮するための環境整備を進めていくことが課題となります。農業者は、農地を耕作し、農産物を生産・販売し、市民は、農業に理解を示し、食べたり、買ったり、体験したりすることで、農業との関わりを持つことが期待されます。そして行政は、それらが実現できる環境づくりを、進めていく必要があります。

これらを踏まえ、アンケート集計結果やヒアリング結果を参考として、国の基本法及び基本計画に基づき、松戸市の農業の課題を次の4つにまとめます。松戸市には、市街化調整区域内農地^(注)と市街化区域内農地^(注)の両方がありますが、本計画では、市内全域で営まれる農業を都市農業と位置づけます。4つの課題は、両区域について共通の大きな課題と捉えていきます。

(注)参考資料 1. 用語の説明



※都市農業に関する農業者アンケート調査結果より

【松戸市の農業の4つの課題】

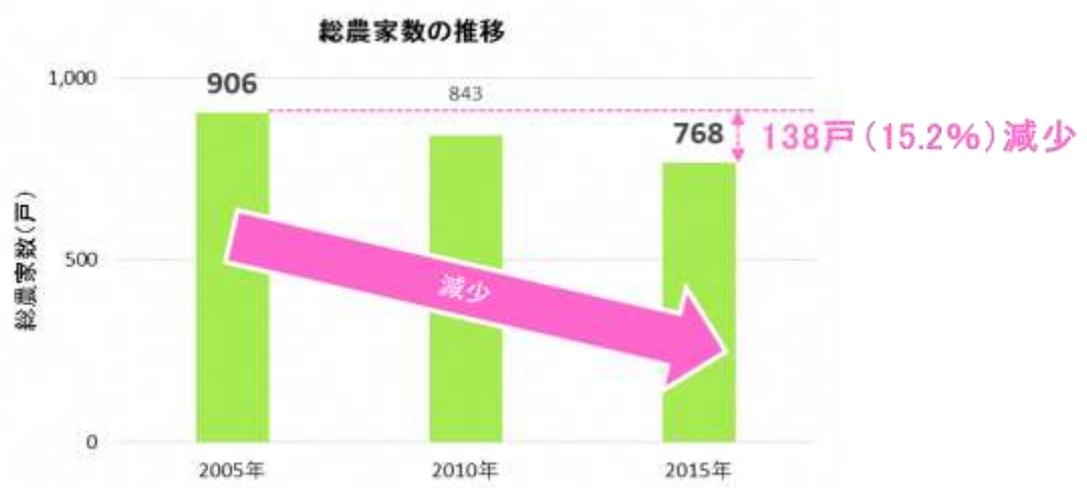
- 課題① 担い手の減少と労働力不足への対応
- 課題② 農地面積の減少への対応
- 課題③ 農産物価格低迷等による経営環境の悪化への対応
- 課題④ 農業と市民との関係性の希薄化への対応

課題① 担い手の減少と労働力不足への対応

松戸市の総農家数と販売農家^(注)は2005年以降減少しています。担い手の減少と労働力不足は、生産力の低下だけでなく、農地の減少にもつながります。

都市農業に関する農業者アンケート調査においても、農業経営上の問題点として、「高齢化等による慢性的な労働力の減少」をあげる農業者の割合が高く、松戸市の農業が存続するためには、「後継者等担い手の育成」が必要と考える農業者が多くいる結果となりました。

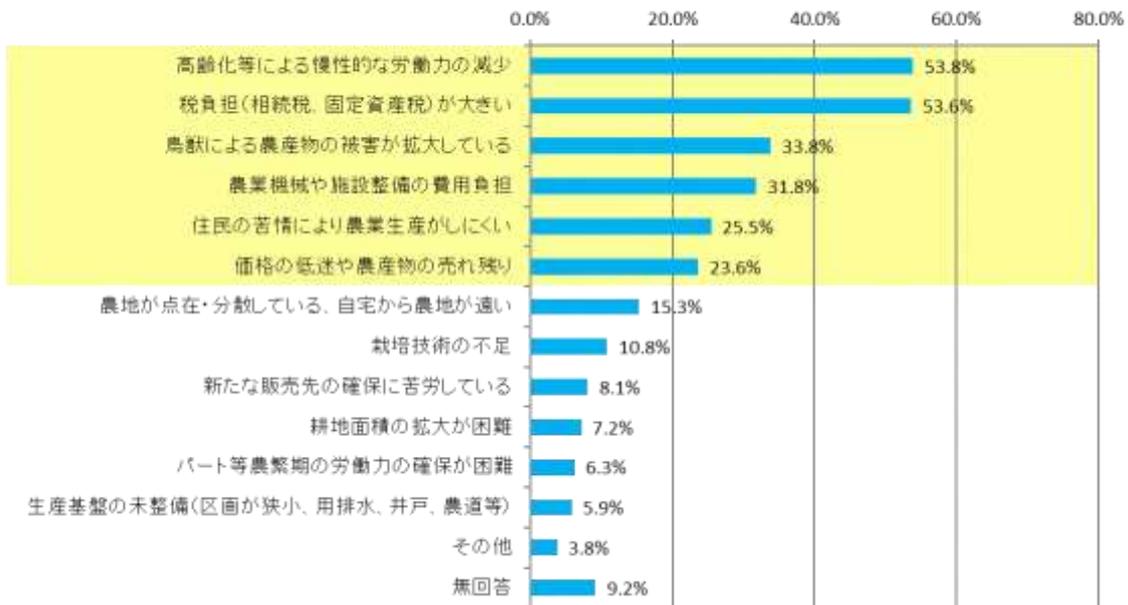
農家の減少と高齢化に対応した新たな担い手の確保を課題として、担い手確保に必要な取組みについて検討する必要があります。



※農林業センサス^(注)(農林水産省)統計データより

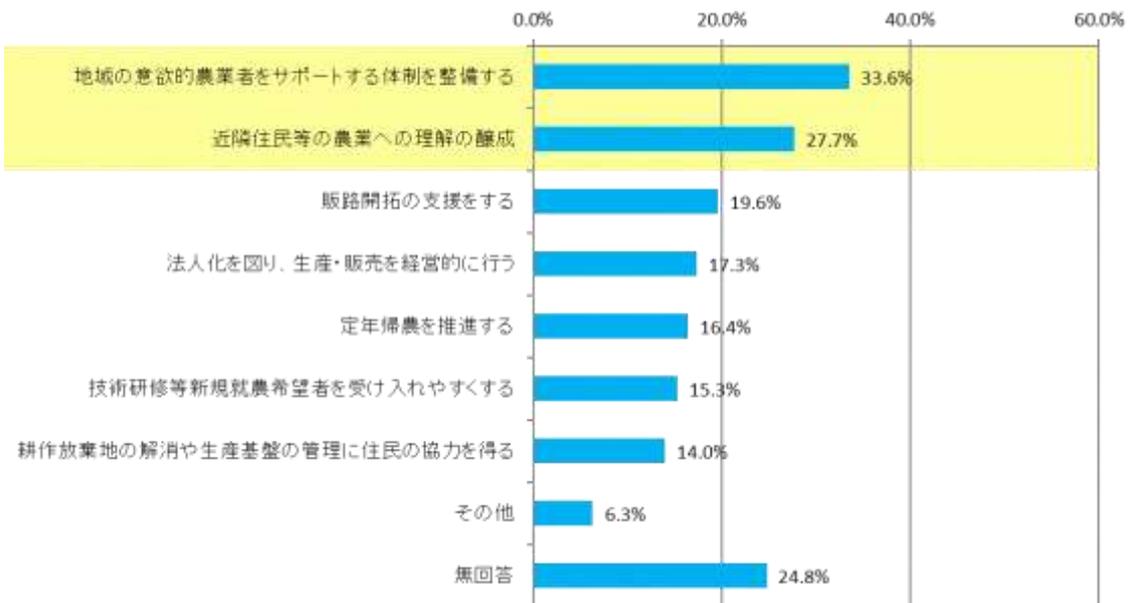
(注)参考資料 1. 用語の説明

農業経営上の問題点について(n=444)



※都市農業に関する農業者アンケート調査結果より

担い手確保に必要な取組みについて(n=444)



※都市農業に関する農業者アンケート調査結果より

課題② 農地面積の減少への対応

松戸市の経営耕地面積^(注)は、2005年以降減少しており、市街化調整区域、市街化区域ともに、農地面積は減少傾向が続いています。農地面積の減少は、新鮮な農産物の供給力の低下となるほか、農業体験や交流の場、緑地空間の減少につながります。その他、環境の保全や、災害時における防災空間としての機能も注目されており、農地面積の減少は重要な問題となります。

耕作放棄地^(注)については、85ha（2005年）から88ha（2015年）と10年間で3haの微増となっています。また、農業委員会と連携し実施する農地パトロールで確認している遊休農地^(注)については、4.8ha（2017年度）となっています。耕作放棄地は、遊休農地の予備群であり、耕作放棄地の増加は、遊休農地の増加につながる可能性があります。

都市農業に関する農業者アンケート調査においては、10年後の経営耕地面積について、「縮小」の回答割合が56.3%となっています。耕作放棄地になる可能性のある農地については、「ある」の回答割合が33.3%となっています。このことから、市街化調整区域においては、利用権設定^(注)をすることで、耕作放棄地化を防ぎ、農地を有効利用する必要があります。松戸市の農用地の利用権設定面積は、19.8ha（2018年3月時点）となっています。

また、農地保全に必要な取組みについての設問では、「相続の税負担の軽減」、「固定資産税等の税負担の軽減」をあげる農業者の割合が高く、次いで、「周辺住民の理解の醸成」、「労働力の確保」、「農地や施設維持のための経費の軽減」となっています。

そのため、市街化区域内農地^(注)についても、農業関連法律及び税制等制度の情報提供、生産緑地制度を活用する等で、農地の多面的機能を活かしながら、農地保全の推進が必要となります。

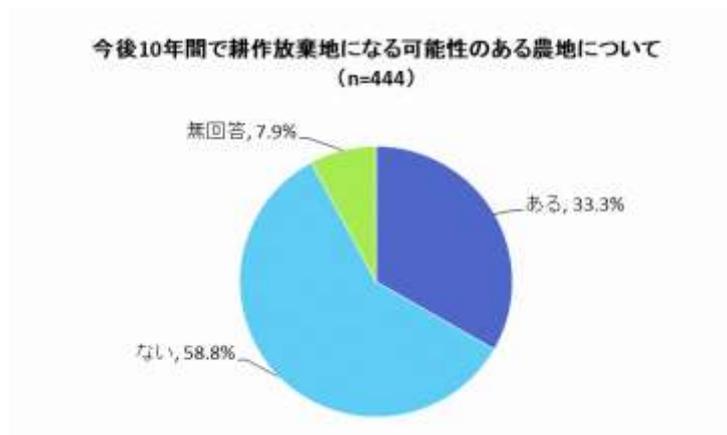


※農林業センサス^(注)（農林水産省）統計データより

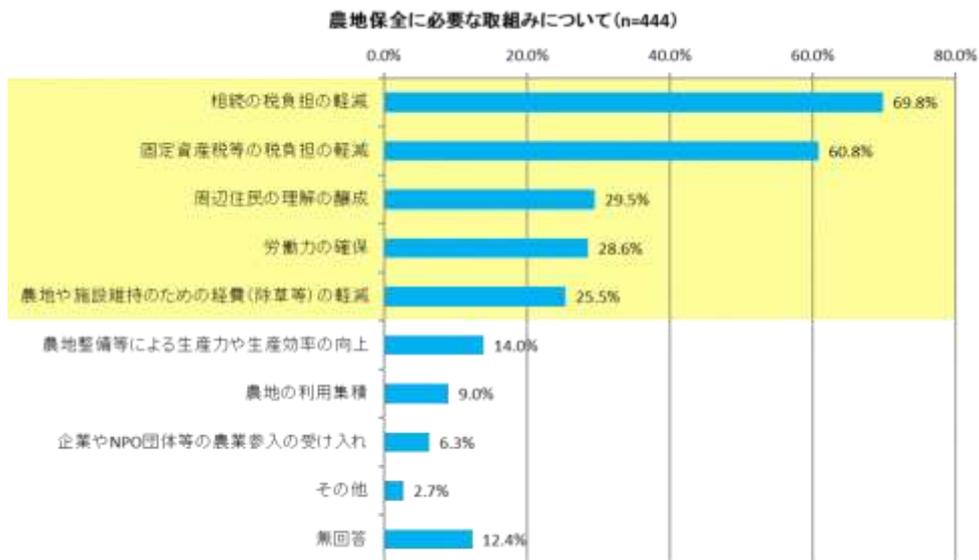
(注) 参考資料 1. 用語の説明



※農林業センサス^(注)（農林水産省）統計データより



※都市農業に関する農業者アンケート調査結果より



※都市農業に関する農業者アンケート調査結果より

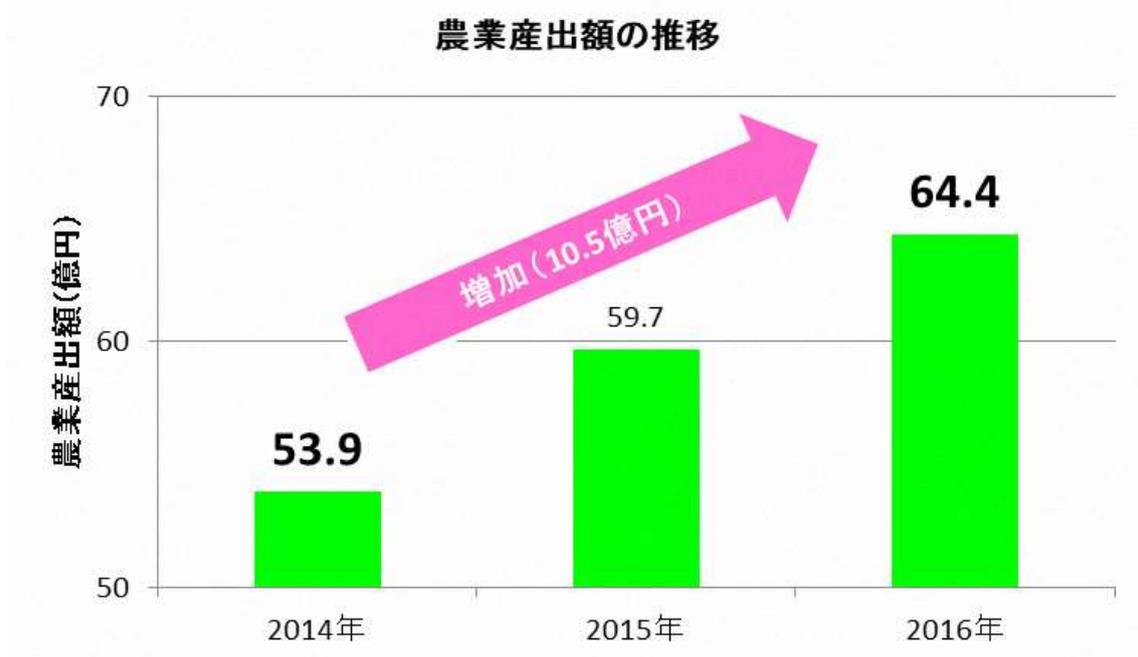
(注) 参考資料 1. 用語の説明

課題③ 農産物価格低迷等による経営環境の悪化への対応

松戸市の農業産出額（推計）は、2014年以降、53.9億円から64.4億円に増加していますが、農産物販売規模別農家数の割合は、2005年から2015年にかけて、販売規模が小さい農家の割合が増加しています。

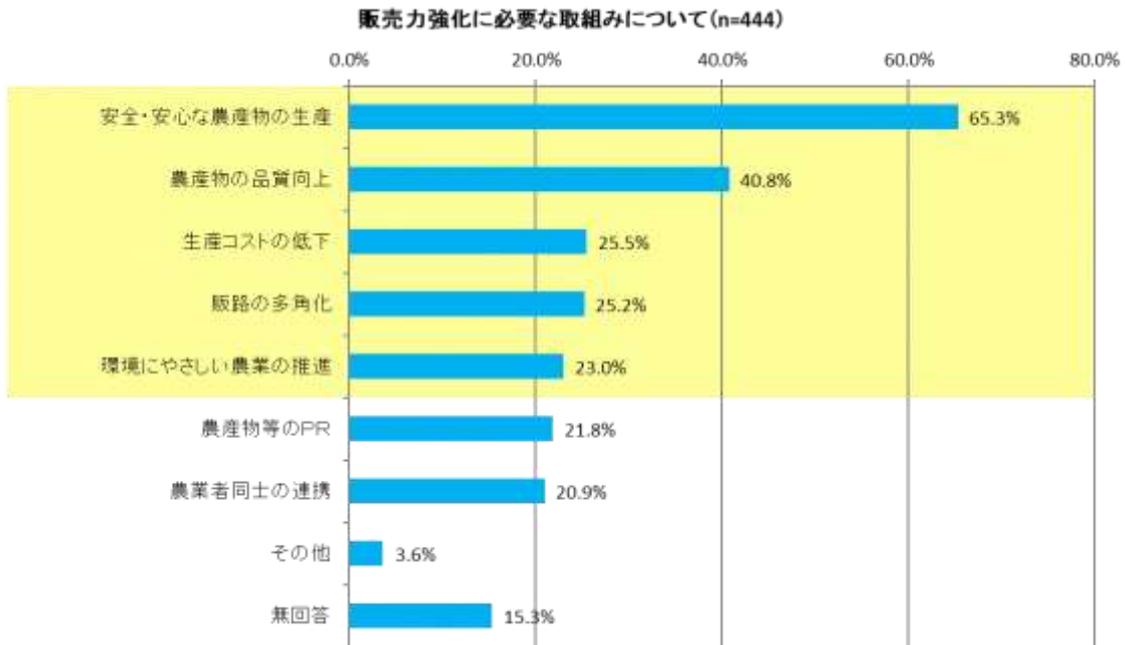
また、都市農業に関する農業者アンケート調査においては、販売力強化に必要な取組みについて、「安全・安心な農産物の生産」、「農産物の品質向上」、「生産コストの低下」、「販路の多角化」、「環境にやさしい農業^(注)の推進」をあげる農業者の割合が高くなっています。一方で、都市農業に関する市民アンケート調査においては、農業行政に期待する役割について、「地産地消の推進」、「環境にやさしい農業の推進」、「担い手の確保」、「農地の保全対策」、「農産物のブランド化」、「農業体験の場・交流の場の提供」をあげる市民の割合が高くなっています。

このことから、安全・安心な松戸産農産物をPRし、農産物のブランド化を推進するとともに、食育や学校との連携等を図り、地産地消の推進が必要となります。

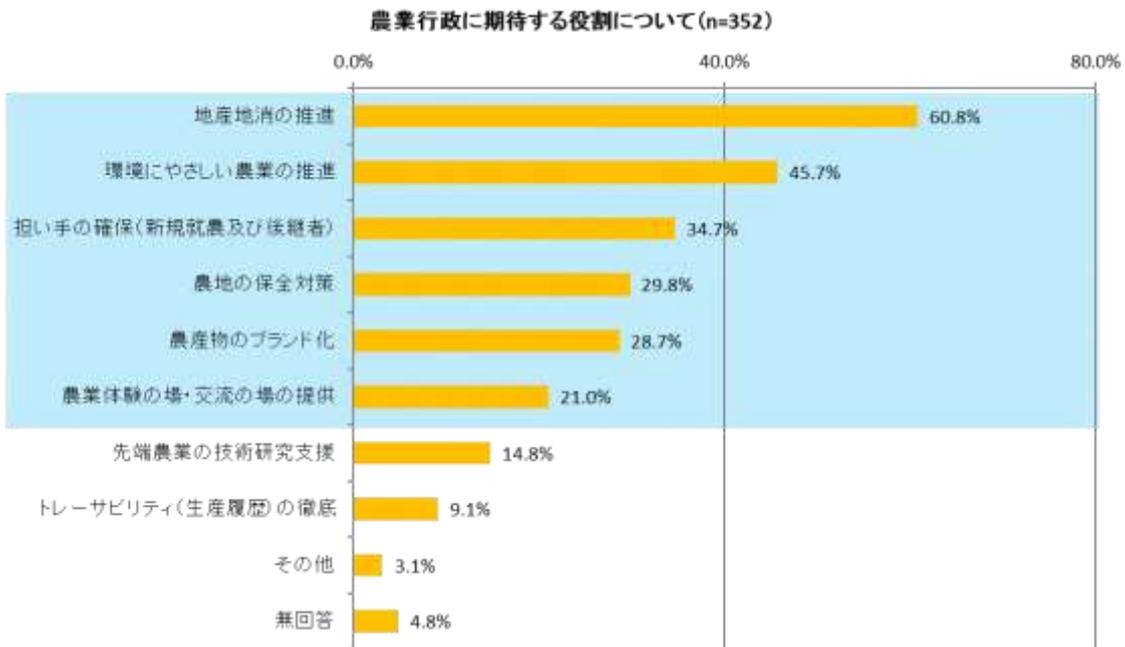


※市町村別農業産出額（推計）（農林水産省）より

(注) 参考資料 1. 用語の説明



※都市農業に関する農業者アンケート調査結果より

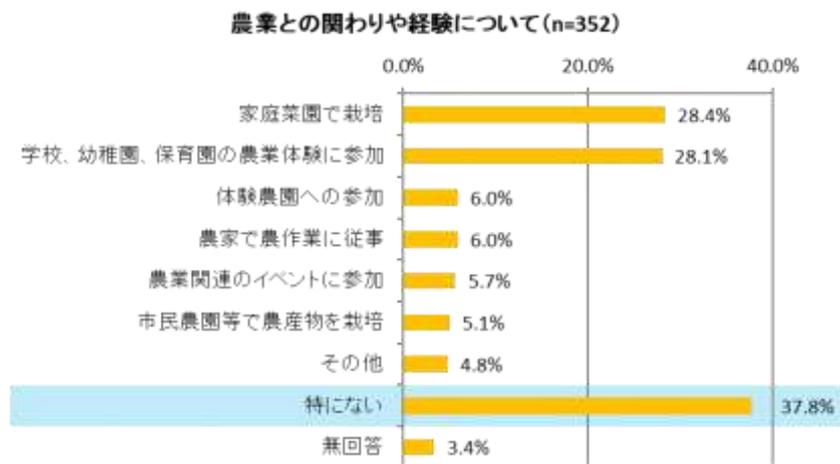


※都市農業に関する市民アンケート調査結果より

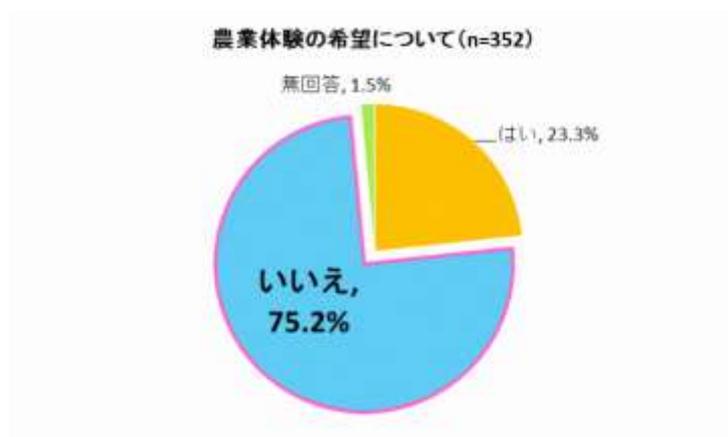
課題④ 農業と市民との関係性の希薄化への対応

都市農業に関する市民アンケート調査において、農業との関わりや経験について、「特にない」とした回答の割合が37.8%と高く、さらに、農業体験の希望について、「いいえ（望まない）」とした回答の割合が75.2%と高くなっています。農業と市民との関係性が、希薄化しています。

また、実施したい農業者との交流については、「農家レストラン^(注)での食事」、「農産物等の販売イベントへの参加」、「農家が開発した商品の購入」、「収穫体験への参加」をあげる市民の割合が高くなっています。一方で、実施したい市民との交流については、「市内産農産物等の販売イベントへの参加」、「援農ボランティア^(注)の活用」、「オーナー農園の実施」、「収穫体験の実施」をあげる農業者の割合が高くなっています。このことから、近隣住民との交流を図り、都市農業や農地の大切さをPRしていく必要があります。また同時に、農地の多様な機能をとおして、農業と市民との関係性を強めることが必要となります。



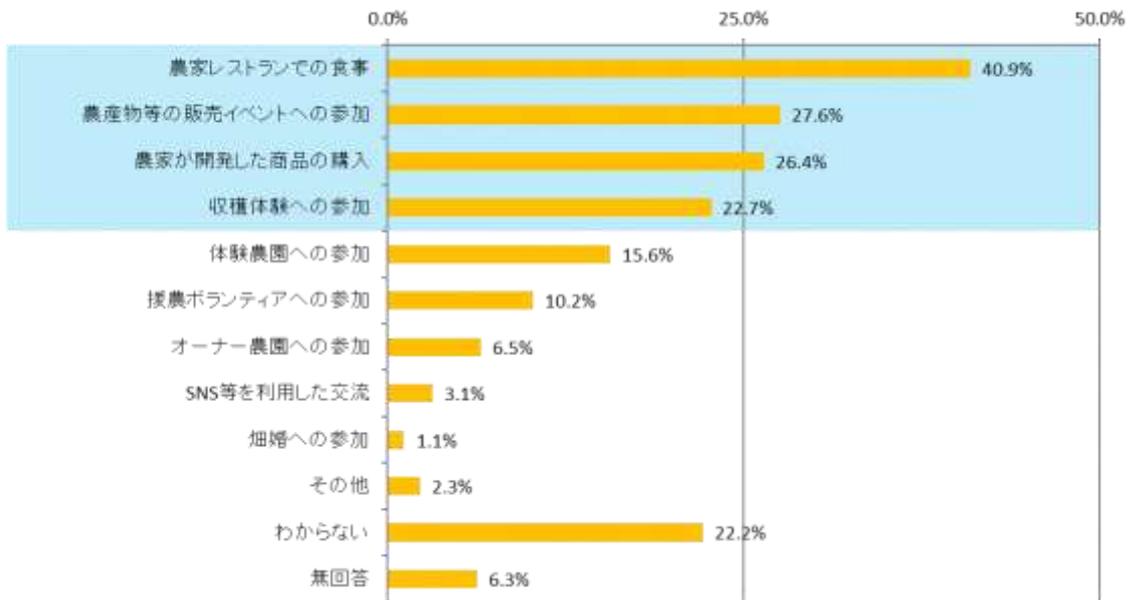
※都市農業に関する市民アンケート調査結果より



※都市農業に関する市民アンケート調査結果より

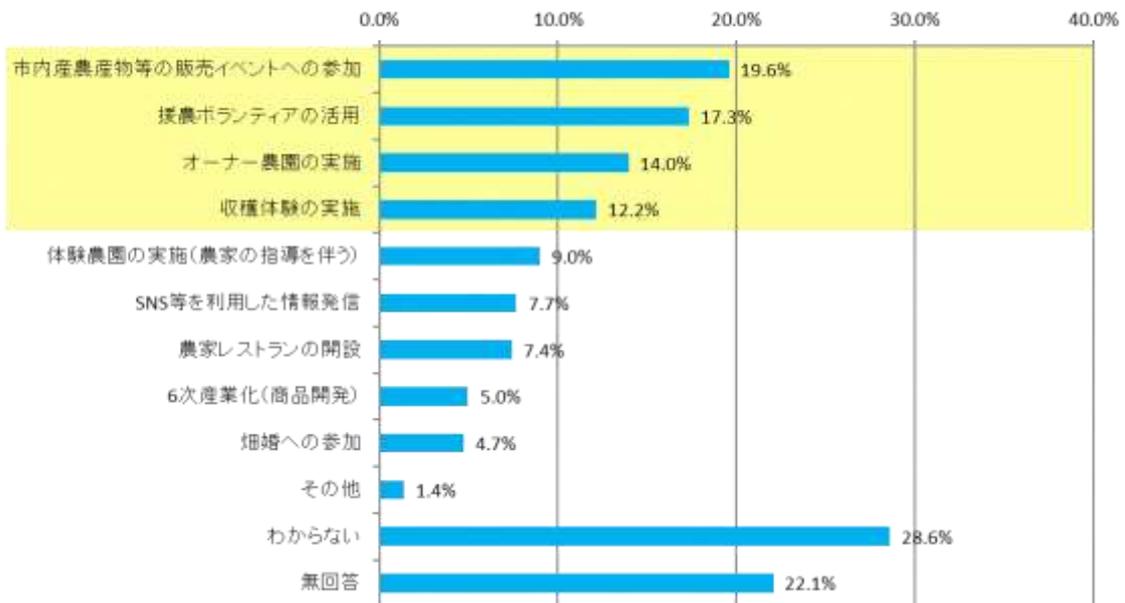
(注) 参考資料 1. 用語の説明

実施したい農業者との交流について(n=352)



※都市農業に関する市民アンケート調査結果より

実施したい市民との交流について(n=444)



※都市農業に関する農業者アンケート調査結果より